

九度山の町並とその文化的景観

調査報告書（その１）

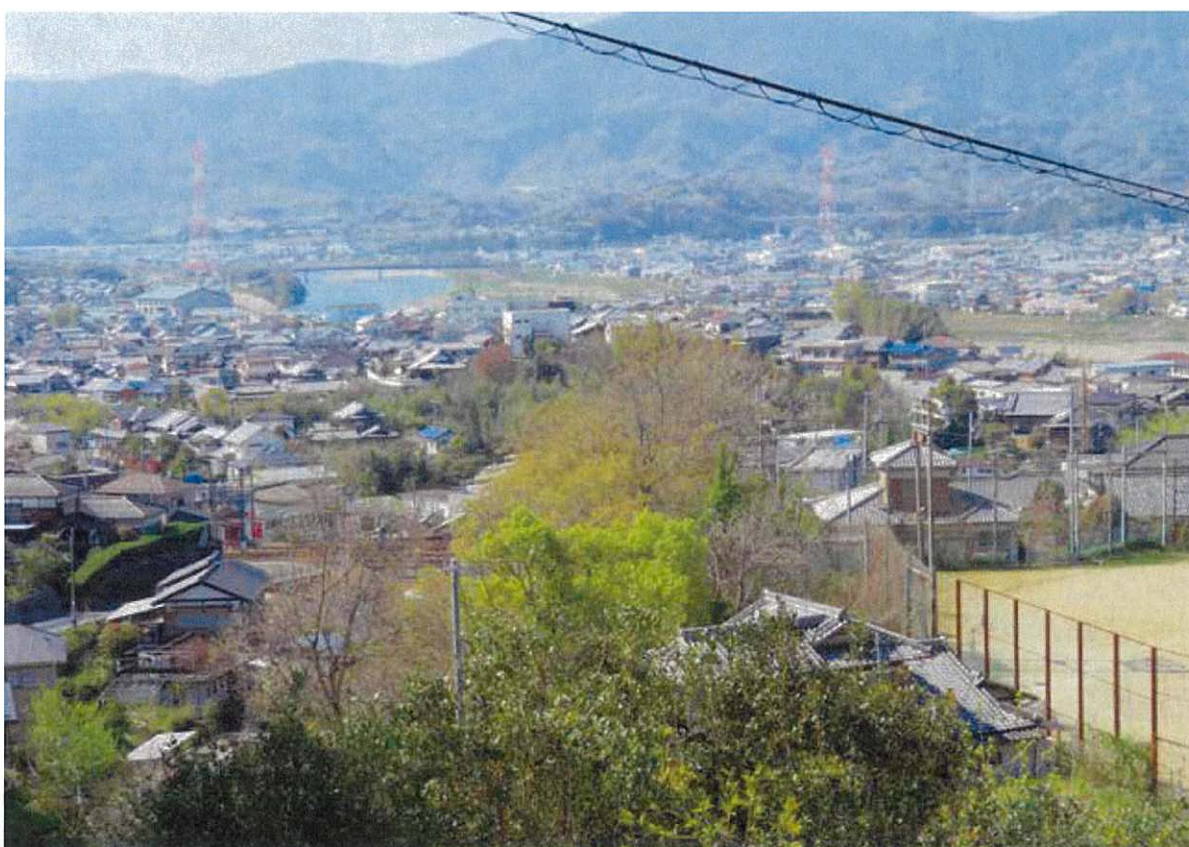


（槇尾山明神社秋祭の神輿巡行）

九度山町教育委員会
山本 新平



口絵 1 町並全景 雨引山中腹から東を望む



口絵 2 町並全景 中学校から西を望む



口絵 3 舟戸の川湊跡と町並（右上の山頂は高野山〔弁天岳〕）



口絵 4 舟戸の川湊跡と土蔵群 東から



口絵 5 中通の西端



口絵 6 中通の西部



口絵 7 中通の中部 1



口絵 8 中通の中部 2



口絵 9 中通の東部 1



口絵 10 中通の東部 2



口絵 11 南通の東部



口絵 12 南通の西部

序 文

「ふらっと散策、歴史のまち」九度山町ホームページの観光案内は、このキャッチフレーズから始まります。

九度山町は古代より高野山の荘園として共に発展を続け、高野七口のうち慈尊院を起点とする「町石道」の他「不動道」と「黒河道」が通過する要衝として、高野山を支えてきました。特に町石道は高野山への玄関口として重要な役割を果たしてきました。さらに、ひのもといち つわもの日本一の兵と評された真田幸村が、関ヶ原の戦いの後、最後の戦いとなる「大坂の陣」までの14年間を過ごした地としても、全国に知られています。九度山町のまちなか観光ガイド「聖地巡礼 紀州 九度山」では、慈尊院のある西地域を「世界遺産エリア」、真田庵のある東地域を「真田の道エリア」として紹介しています。本調査報告書は、この2つの地域を横断する高野七口より古いルートとして存在した「槇尾道」に焦点を当てています。

「九度山の町並みとその文化的背景」は令和6年度まで12年間、本町教育委員会社会教育指導員としてご尽力された山本新平氏が、在任中に収集されたデータや写真等を基に作成しました。第1章では九度山町の概要を、第2章では世界遺産エリアの町並を、第3章では真田のみちエリアの町並を、それぞれ豊富な写真や資料とともに例示しながら、その歴史的な価値や魅力についてわかりやすく解説しています。この研究成果はこれまであまり知られていなかった九度山の魅力をさらに多くの人に伝え、これらの文化遺産を活かした地域活性化や後世へ継承する原動力になるものでしょう。ホームページで本調査報告書を発見した人々が、スマートフォンを手に『歴史のまち九度山』を散策する様子が浮かびます。

最後に九度山の町並の文化的景観の調査研究に熱心に取り組んでいただきました山本新平氏をはじめ、この報告書の作成に関わっていただきましたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

令和7年11月

九度山町教育委員会
教育長 前田 南海男

例 言

- 1、この報告書は山本新平が平成 25 年度から令和 6 年度まで九度山町教育委員会社会教育指導員として勤務（非常勤）していた折に、『九度山の町並』等に関して収集した史料・資料・現地調査データ・写真等を基に作成し、令和 7 年 4 月以降においては自主的にこれらを基に更に修正・追加・写真の撮り直し等を行いまとめたものである。
- 2、この間は町並に関する事項のみでなく、町内全域を対象とした各種文化財の悉皆調査・町民等への「文化財出前講座」・文化財に関する様々な照会・町指定文化財候補物件の資料作成・九度山町文化遺産を活かした地域活性化事業・日本遺産「女人高野」の調査と報告書等をも分掌してきたが、各種の文化財施設・団体・個人等大勢のご協力・ご支援をいただきながら進めることができた。
- 3、本稿において基礎資料として引用している『古絵図』については専門に収集・研究したものでなく、日野西眞定編著・解説索引の『高野山古絵図集成』昭和 58 年・同 63 年、和歌山県立博物館の特別展『弘法大師と高野参詣』の図録 平成 27 年、高野山大学図書館編集の『高野山大学図書館所蔵 高野山古絵図集成』2020 年、『紀伊国名所図会』等を基に論考したものであるが、それぞれの古絵図は一切実見したものではない。
- 4、本稿において直接対象とした「古絵図」類の名称は、史料①の高野山東京別院の古絵図（江戸時代前期～中期）日野西『古絵図集成』140 頁～、史料②の高野山西南院の古絵図（江戸時代後期）は日野西『古絵図集成』212 頁～、史料③の九度山区有の古絵図（明和 3 年）『町史 史料編』口絵、史料④の高野山持明院の古絵図（江戸時代後期）は日野西『古絵図集成』236 頁～、史料⑤は横浜海照寺の古絵図（江戸時代後期）は日野西『古絵図集成』234 頁～、史料⑥-1 は天野丹生都比売神社の古絵図（江戸時代 19 世紀）和歌山県立博物館の特別展『弘法大師と高野山参詣』の図録 162 頁と⑥-2 は個人蔵の『参詣要覧 高野山名所図絵』（大正 11 年 [1922]）同図録 48 頁、史料⑦-1・2 は『紀伊国名所図会』、史料⑧は『大日本帝国陸地測量部 「五万分の一測図」』明治 41 年（1908）、史料⑨は高野山大学図書館蔵高野山古絵図集成『参詣要覧 高野山名所図絵』大正 11 年（1922）の 123 頁に掲載された図である。
- 5、本稿に掲載した古絵図等にかかる図版は、すべて上記刊本から掲載したものである。
- 6、町並や文化的景観に関する「報告書」においては各個別建造物の詳細についても調査・記述すべきであるが、その実施については未確実な状況にあるためあえて本題の後に『（その 1）』を付加し、次に続けていきたいことを明示した。
- 7、本稿においては、昭和 40 年の九度山町史を「旧町史」、平成 12 年から 21 年までの『改訂九度山町史』を「町史」と略した。
- 8、慈尊院と九度山地区町並の外観調査における 5 区分の表示については、山本が実施した現地調査データの図化と挿図等の作成は田村收子氏に依頼し、編集についても全面的に協力を得た。
- 9、筆者は「日本建築史」を専門分野としており、歴史や美術史等に関する専門知識を有しておらず史料の検索・評価・判定等については不十分な状況にある。
- 10、本稿にかかる現地調査・まとめ・編集・写真撮影（但し航空写真は九度山町が撮影したもの及び古絵図・古写真を転載したものについては出典を明示）等全ては山本が単独で行ったものであり、この報告書に関する文責は総て山本にある。
- 11、本稿で論考した事項について、山陰加春夫氏、宮川智子氏にご教示・ご指導をいただいた。
また、前滝悟氏から各種の史資料・現地の情報について提供を受けた。

この報告書は一切印刷しておらず、全てのデータは「九度山町公式ホームページ」において公開している。

目 次

第1章 九度山町の概要について

1 節	はじめに一和歌山県内における町並調査の経緯	1
2 節	九度山町の地勢と歴史的な位置付け	1
3 節	九度山と高野山の関係	3
(1)	高野七口	3
(2)	槇尾道	5
(3)	人の流れ	6
(4)	物の流れ	7

第2章 慈尊院の川湊と町並について

1 節	はじめに	11
2 節	慈尊院の概要	11
(1)	慈尊院建造物の造営と参詣ルート	11
(2)	慈尊院弥勒堂の再建等	12
(3)	慈尊院の築地堀	13
(4)	慈尊院境内と建造物の移転	14
3 節	慈尊院の川湊と町並	16
(1)	川湊と陸路における運搬ルート	16
(2)	慈尊院地区の川湊	20
(3)	慈尊院の町並	23
1)	古絵図からみた町並	23
2)	慈尊院町並の現況	26

第3章 九度山の川湊と町並について

1 節	はじめに	30
(1)	聞き取り内容	31
1)	九度山区和讃講について	31
2)	活動内容等	31
2 節	外観調査	32
3 節	外観調査の項目	33
(1)	時代区分	33
(2)	構造区分	35
(3)	階数区分	35
(4)	屋根形式区分	38
(5)	屋根葺材料区分	38
(6)	土蔵	41
1)	土蔵の構造・階数等	41

2)	土蔵の規模	42
3)	土蔵群	44
4)	土蔵の軒と屋根形式の分類	44
(7)	石垣の種類	47
1)	旧観音寺境内（盛栄地区の町中駐車場、旧役場跡）の石積み	48
2)	遍照寺境内の石積み	48
3)	大型の玉石+隅部は結晶片岩の石積み	49
4)	小型の玉石+隅部は結晶片岩の石積み	49
5)	小型の玉石積み	50
6)	間知石積み	50
(8)	その他の装飾等	50
1)	鍾馗像	50
ア、	軒下の部分に取り付けるもの	50
イ、	鬼瓦のそば・大棟熨斗積みに設置されるもの...	50
ウ、	鬼瓦の鬼面そのものの図柄とするもの	50
2)	金太郎像	50
ア、	米金（旧河原医院）	50
イ、	鬼瓦の鬼面意匠	50
3)	鰻絵等	50
ア、	陰盛 鬼瓦の周りに漆喰を大きく盛り付け、巨大な鬼面を造り出す	50
イ、	大棟熨斗積みの両端部部分に漆喰を厚く塗り上げ、この立面に唐草等の文様を立体的に造り出し、化粧する	50
ウ、	塗り込め破風板尻に、唐草等の文様を造り出す	50
エ、	軒下隅壁部分の隅棟の飾り	50
4)	塗装等の化粧	50
ア、	「千代ヶ丘」の河原家（現在取壊されている）...	50
イ、	「舟戸」の萱野家	55
ウ、	「千代ヶ丘」の佐田家	55
5)	井戸	55
6)	真田の抜け穴	56
7)	看板建築	57
8)	織物工場建築	59
9)	社寺・小祠	60

10) 近代建築.....	67
11) 修復・活用事例	67
4 節 古絵図等に描かれた九度山の川湊と町並	69
(1) 高野山東京別院の古絵図	69
(2) 高野山西南院の古絵図	70
(3) 九度山区の古絵図.....	71
(4) 高野山持明院の古絵図	73
(5) 横浜海照寺の古絵図.....	74
(6) 天野丹生都比売神社の古絵図	77
(7) 紀伊国名所図会の古絵図	77
(8) 大日本帝国陸地測量部の地図	78
(9) 個人・高野山大学図書館の古絵図.....	79
5 節 町並の現況	81
(1) 『中通』の景観.....	81
① 『中通一西部』.....	81
② 『中通一中部』.....	87
③ 『中通一東部』.....	92
(2) 『南通』の景観.....	94
④ 『南通一東部』.....	95
⑤ 『南通一西部』.....	98
あとがき	106

九度山の町並とその文化的景観調査報告書（その1）

第1章 九度山町の概要について

1節 はじめに一和歌山県内における町並調査の経緯

和歌山県内の町並（伝統的建造物群）の調査については、財団法人観光資源保護財団による「黒江の町並と民家」（昭和59年）にはじまったがその後休止している。筆者が県教育庁文化財課に在職中の昭和63年度から実施した「近世社寺建築調査」の予備調査において単独で県内の約2200箇所・4000棟余の社寺建築の外観調査を行った時、折に触れて県内町並の概要把握に努めある程度の目安を定め関係市町村と協議を進めてきた。

その中で第1番として「湯浅」と「広」の町並について、平成3年から単独で湯浅において約2300棟・広で約200棟を超える外観調査（各棟の時代区分のみ）を実施し、その資料を基に湯浅町内において地域住民との協議・調整をすすめてきた。

その結果湯浅町は平成11・12年度において国庫補助を受け大勢の研究者の協力を得て『紀州湯浅の町並—伝統的建造物群保存対策調査報告書』をまとめ、湯浅町がその成果を基に住民との具体的な調整を行い平成18年12月に国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けることができ、直ちにその保存対策事業を連続して実施中であり、めざましい成果を積み重ねてきている。

これらと平行して筆者が（財）県文化財センターへ異動となり、その建造物技術者と一緒に休日を利用して県内町並の外観調査をスタートさせ、平成10年に『紀州北部の町並』として紀の川流域の和歌山市・岩出市・紀の川市・かつらぎ町・橋本市管内の21集落について初めて広域的な報告書にまとめたが、その後中座している。

平成14年に「橋本の町と町屋の研究会」がまとめた『橋本の町と町屋』は橋本・古佐田・東家地域における歴史的建造物をほぼ網羅した調査を行

い大部な報告書にまとめあげ、県内町並調査報告書のなかで際立った内容にまとめている。

筆者は平成17年に太地町太地における『木造・和風建築にペンキ塗り塗装を行う集落群とその太平洋沿岸地域に広がるペンキ塗り集落の広がり』^{註1}、平成24年に『白浜町中地区の集落景観とその復原』^{註2}、同29年に『九度山町河根の集落とその景観』^{註3}、同30年に『九度山舟戸の川湊史料と現況』と『河根の建築景観と元中屋旅館について』^{註4}・同年『旧河根峠永楽屋の施設について』^{註5}、令和2年に『色川の集落景観と荒木家住宅について』^{註6}、同3年に『九度山町内における「紀の川の川湊」遺構』等について町並やその文化的景観について調査しその概報告書をまとめその保存と活用について関係者・関係機関と調整をすすめてきたが、『湯浅の町並』に続く具体的・詳細な調査と保存対策については残念ながら進捗していないのが現状である。

2節 九度山町の地勢と歴史的な位置付け

九度山町は和歌山県の北東部に所在し、紀伊山地の北端部を流れる大河—紀の川の中流域の左岸に位置する。町域の面積は44.2km²、北は紀の川・東は橋本市・南は高野町・西はかつらぎ町に接する。最低標高は61m・最高標高は1008mで殆ど総ては山間地で、主要産業は農業・特産の富有柿は日本一の品質を誇る。人口約3800人・所帯数1800戸余・年間予算歳入・歳出共43.7億円の小規模な行政区域である。

紀の川は日本有数の多雨地帯である紀伊山地の北麓を奈良県（吉野川）から和歌山県（紀の川）を横断してほぼ一直線状に西に向かって流れ紀淡海峡に注いでおり、『九度山町』は紀の川を界して直接海とつながるという地形環境にある。

この流路は紀の川の流れのみで形成されたので

はなく、日本最大の活断層である「中央構造線」に沿って大きく異なる地質上の境界をなす北の「和泉層群」の軟質である「和泉砂岩帯」と南の「三波川帯」の硬質である「結晶片岩（緑泥片岩）」の境を流れることにより造り出され、結晶片岩の露頭部により湾曲部が造り出されその諸所に深い淵を形成している。

ここでは深い水深と緩やかな流れを形成しており「川湊」としての自然的要件を備えており、九度山の「舟戸」は『真田淵』と呼ばれる位置にあり正に川湊としての自然的な条件を満たしている。^{註7}

次に歴史的な位置付けについては、やはり僧空海による真言密教修禪の場として開創された『高

野山』を抜いては考えられず、このことは決定的な要因であろう。空海は宝亀5年（774）に讃岐国（香川県）で生まれ延暦12年（793）に槇尾寺（西国三十三所観音霊場第4番札所 別名施福寺、大阪府和泉市）で修行を続け出家し、弁財天を大いに信奉していたと伝えられている。

同23年（804）に遣唐使の一員として唐へ渡り長安青龍寺の高僧恵果に師事し密教の教義を究め、唐からの帰国にあたり真言密教の修行の地を指し示すように託して三鈷杵を投げたとされる『飛行三鈷杵』の伝承は高野山を聖地化するための後世の説話であるが、帰国後は高野山を真言密教修業の場と定め更に研鑽を極められてきた。

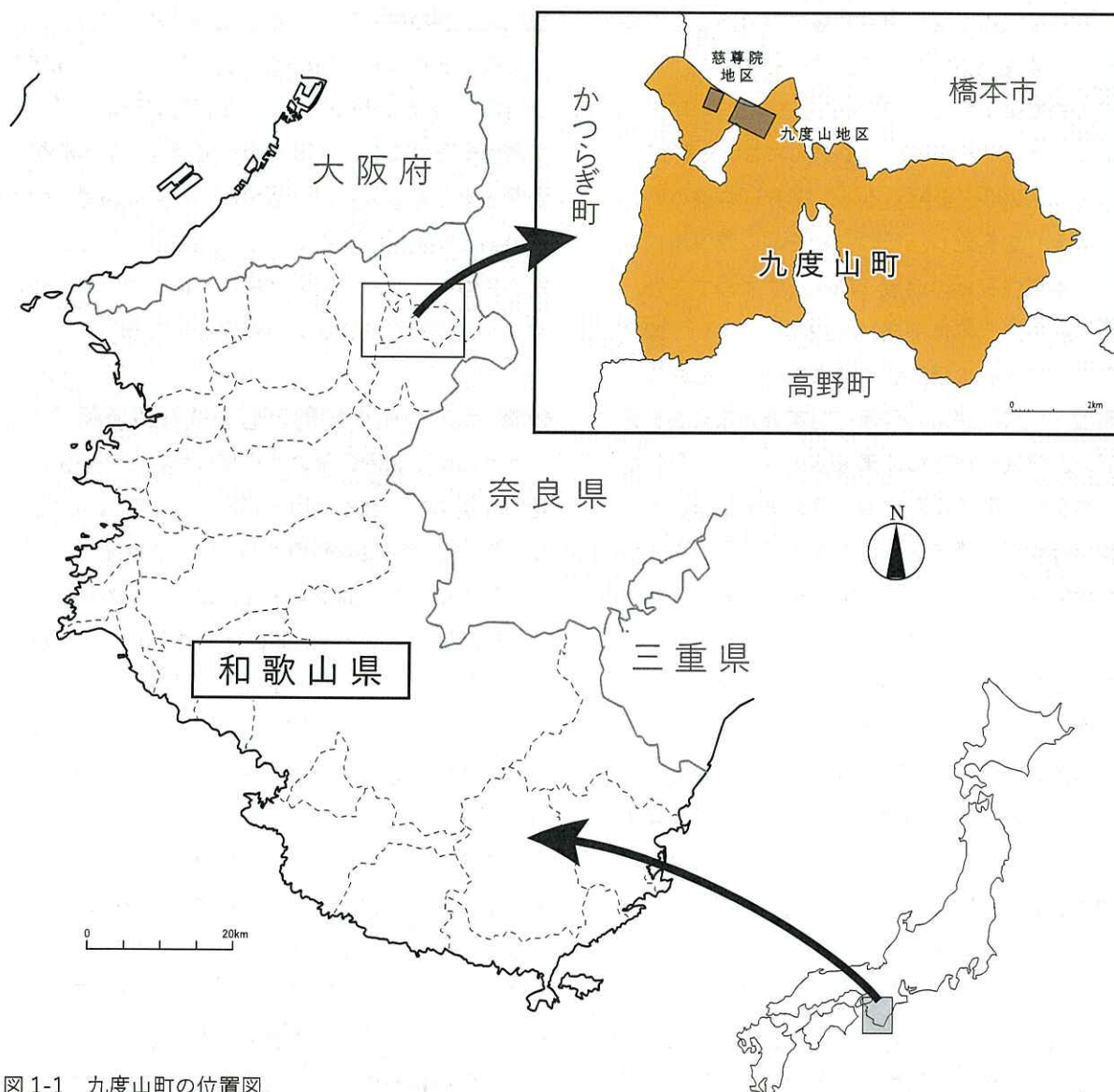


図 1-1 九度山町の位置図

空海は入唐以前から槇尾寺を拠点として修行を続け山林抖擻等を通じてこの『高野山』という特別な地を熟知していたと考えられ、高野山へ案内した「高野明神」(狩場明神)とこの地の地主神であった「丹生明神」との関連を説話として昇華されてきたものであろう。

高野山を修行の場と定め修行中においても頻繁に高野山と槇尾寺を行き来し修行されていたが、紀の川の氾濫により渡河できなかったため弁財天の宣託によりこの九度山の槇尾山明神社の地に弁財天を祀り、月に九度にわたり修業にき続けたこと等により当地の地名である「九度山」の名が起こったとも伝えられている^{註8}。

空海の大いなる事績に対し弘仁7年(816)に嵯峨天皇から「高野山」の地を賜った際の『金剛峯寺縁起』(御朱印縁起)において、寺領の北東隅を示す榜示となる地点として『槇尾』の明示があり重要な地点とされ、この地点が現在の『槇尾山明神社』に当たるとされている。

その後空海は高野山等で真言密教の教義を確立し全国に広めてきたが、承和2年(835)に「奥の院」の浄窟で入定され、延喜21年(921)にこれまでの業績により『弘法大師』の諡号を賜り、白河法皇の寛治2年(1088)・藤原道長の治安3年(1023)等の参詣を始めとした歴代の法皇や皇族を始めとし藤原摂関家らによる『高野参詣』が続き、貴族・武士階層のみならず次第に一般庶民にまで広まり「大師信仰」や高野山への「納骨信仰」が大いに興隆し、全国津々浦々から高野山を目指して参詣するようになってきた。

九度山町域の大半は南の高野町に接し古代から高野山の重要な荘園であり続け、高野山への重要な参詣道であった『高野七口』のうち「町石道」と「不動道」と「黒河道」が通過し、町石道と黒河道はユネスコの世界文化遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』に登録されている(不動道は高野町域の一部のみが登録されている)。町石道の起点であり高野山の政所が設置された「慈尊院」は教義的にも最も中心的な地であり、ヒトは参詣道を通り、

モノは紀の川を利用した舟運とその参詣道を利用して実質的に高野山を支え続けてきた。歴史的には昭和30年代にいたるまで高野山と最も深い繋がりをもって発展してきたという状況にあったといえよう。

3節 九度山と高野山の関係

(1) 高野七口

全国各地から高野山を目指す参詣道は七つの大きな道に集約され、高野山の『聖域』と定められた範囲とこの参詣道の結節点をそれぞれの結界と定めその地点を「高野七口」とされてきたが、次第にその七つの参詣道そのものをも含んだ総称として「高野七口」と称されるようになってきた。

この高野山を目指した七つの参詣道は、北方からは紀の川左岸沿いの道(高野山持明院所蔵の古絵図に「慈尊院道」との記載がある)から南の高野山を目指す①「町石道」、②「不動(坂)道」、③「黒河道」の3ルート、東方からは奈良県に所在する修験道の霊山である大峰山から高野山を目指す④「大峰道」、南方からは熊野信仰の拠点である熊野三山の一つの熊野本宮から高野山を目指す⑤「大滝道」(小辺路)と⑥「相浦道」、さらに龍神と清水から高野山を目指す⑦「湯川道」であるが、これら七つの参詣道は同時に成立し整備されたのではなく、大師信仰の興隆に従い暫時的に相当期間を要して整備されてきたと考えられる^{註9}。

このうち九度山町と直接関係する高野山への人の流れについては京・大坂方面からが中心であり和泉山脈の紀見峠を越え「橋本」で伊勢街道(大和街道)と交差し、紀の川を渡河し、左岸沿いを下る道(慈尊院道)から分岐して南の高野山を直接目指す上記3ルート(①・②・③)がある。

そのうち最も上流側に位置する③の「黒河道」は紀の川畔の橋本市賢堂から壇上伽藍まで約18kmで、このルートのうちで「橋本」から起算すると伽藍までは最短の距離となる道ではあるが4つの大きな峠を越えるルートである。賢堂からほぼ一

直線に南の高野山を目指し九度山町市平・同久保・高野町鶯谷の黒河口に至る道である。4つの大きな峠を越えねばならないルートでアップダウンの厳しい道で、橋本から起算すると伽藍までは最短となる道であるが一般の参詣道としては余り利用されなかったようで、現地には関連する遺跡や史料も極めて少ない道である。

賢堂から約3km下流に位置する②の「不動道」は橋本市学文路から南の高野山を目指し紀の川畔から壇上伽藍まで約16kmで、このルートは中世から明治時代まで最も利用されてきた道である。学文路から九度山町河根・高野町作水・神谷・極楽橋を経て不動口に到る三つの峠を越えるルートであるが比較的緩やかな道で、中世から明治時代中期まで最も多くの参詣者が利用した道であり、関連する遺跡等が多く残されている。

そのルートのうち北方部（学文路から神谷まで）は明治34年（1901）紀和鉄道（現JR和歌山線）の開通により、名倉駅（現高野口駅）から徒歩で九度山町九度山・同椎出を経て神谷辻において不動道に合流し高野山を目指すルートに取って代わられてきた。このルートは次項で述べる「槇尾道」の後半部分と重複する道である。

橋本市学文路から約3km下流に位置する①の「町石道」は紀の川畔の九度山町慈尊院地区には高野山の「政所」が設置されその中に『慈尊院』が設けられ、ここに弘法大師空海母君の廟所が営まれ七口のうちでは最も古い参詣道である。この地点から壇上伽藍まで約20kmで、九度山町慈尊院からかつらぎ町天野・九度山町笠木・高野町矢立を経て高野山に到り、さらに奥の院の弘法大師御廟にまで至る道である。

この道は真言密教の教義に則って起点となる「大塔」から慈尊院までを「胎蔵界」の180尊と、「大塔」から奥の院御廟まで「金剛界」の37尊の空間になぞらえ当初は木製の卒塔婆が建てられ、その後鎌倉時代には慈尊院から奥の院御廟まで合計二百数十基もの「町石」と「里石」がそれぞれ花崗岩製の大型五輪卒塔婆が建立され、現在でもなおそ

の約80%以上の五輪卒塔婆が残されている。教義的・歴史的にも最も重視された道であり、一つの峠を越えるという最も緩やかな道であるが、距離は最も長いルートである。

（2）槇尾道

これらのルートのうち本稿の主題である「九度山の町並」に最も関わるルートは前述したように槇尾寺と高野山とを繋ぐ『槇尾道』で、この道は高野七口そのものではないが「不動道」の後半部分（高野町神谷以降）が重複する。この道は七口が成立する以前において空海自身が槇尾寺で修行のため山林抖擞を続けていた途次において、既に修行に最も適した『高野山』という地を熟知していたと考えられる。空海は唐から帰国後においてもこの槇尾寺と高野山の地で修行を続けてきたとされ、この様な状況からみて当初から修業のために開拓されてきたルートであることから、高野七口（特に最も重要視されてきた「町石道」）が成立するよりも更に古い道であると考えられる。

この槇尾道のルートは「高野山」からみると、不動口から下山して不動道の「神谷辻（高野町神谷）」において北西方向に分岐して、九度山町の長坂・椎出・梨の木峠・槇尾山明神社・九度山・入郷・慈尊院を経てここで紀の川を渡河して槇尾寺を目指す道である。この渡河地点については江戸時代の古絵図においては、無銭の渡し施設は2箇所において記載されている。

その地点は次に述べる古絵図において、現慈尊院正面から真北約150mの紀の川畔に『永代無銭』と記された石碑がある渡し場と、さらに西方へ約150m下流に所在する「嵯峨浜」には『此所無銭舟渡 槇尾寺ミチ』と記されており、ここから紀の川を渡河し橋本市高野口町大野やかつらぎ町西飯降・妙寺から北上して「蔵王峠」を越えて、槇尾寺を目指す道である。

槇尾道は高野山の壇上伽藍から不動道と槇尾道を通して九度山まで約16km・更に慈尊院までは約1km、慈尊院から槇尾寺まで約19km、合計約36km

の道で、修業のためのルートを起源とし発展してきた道であったと考えられよう。

この槇尾道のうち高野山から九度山・慈尊院までについては、そのルートや関連する絵画史料・遺跡・道標等については相当に現地調査を進めてきているが、紀の川の右岸に渡河してから槇尾寺までについてはまだあまり調査を進めていないのが現状である。

このように、「九度山地区」と「慈尊院地区」は古代から江戸時代までずっと『高野山領』であり続けたと言うことは、高野山にとってこの地域は信仰及び物の流れからみてその生命線であったことを正に示していると考えている。

次章で述べる古絵図調査の結果からみて中世以前の状況については全く不明であるが、近世においては九度山の「舟戸」は高野山への物流の基地であったことは間違いのないことと考えているが、それらの数量的・具体的な事項についての根本史料の調査はすすんでおらず、その研究もなされていないのが現状である。

(3) 人の流れ

人の動向と流れについては高野七口の利用が中心であったと思われるが、上記の通りその中でも紀の川を経由する3つのルートが中心であったと考えるのが基本である。数量的に比較できる史料の研究が進んでいないようであるが「不動道」が最も多く次いで「町石道」となり、「黒河道」については最も少ないというのが一般論からして実態であったろう。

単一箇所への参詣にあっては同じ道を往復するのが一般的であろうが、大規模な巡礼や時代と共に複数の霊場を巡る参詣が多くなりその往路と復路とを検討することが必要であろうが、このことについては余り触れられていないのが実態であるようである。

このことについては、中世後半頃からは複数の聖地を巡る巡礼が盛んになってくるとされているようであり、管見のうちでは全体から見た具体的

な数量を明示できないが九度山を考える上で「高野参詣」と「西国巡礼」を同時に一体として行っている史料が散見されることから両方のルートを考える必要がある。

具体的には西国巡礼の途次において第三番札所の「粉河寺」から第四番札所の「槇尾寺」へは直接向かわずに、大和街道（伊勢街道）の「高野辻」（紀の川市）において大和街道から別れて南東方向へ分岐して紀の川を渡河し、高野山へ向かうルートである。渡河後については麻生津→赤沼田→麻生津峠（以上は紀の川市）→日高→市峠→志賀（以上はかつらぎ町）→花坂→矢立（以上は高野町）において「町石道」の第60町石で合流し高野山へ向かうという「西国道」を利用して高野山へ詣でるルートである。

中世の前半におけるこのルートに関する史料については不明であるが、中世後期において次の慈尊院の項で述べる「妙音比丘尼」はこの西国道のコースをとったとする詳細な史料は確認できていないが、妙音が慈尊院へ奉納した巡礼札（後述の註14に全文を掲載）においては、天文9年（1540）の西国巡礼については33回目の満願を果たした折に慈尊院へも参拝している。その「巡礼札」や「高野春秋」においては相当以前から慈尊院へも参拝を重ね続けていることが記されており、その10月の弥勒堂再興の柱立儀式にも参列していることが知られ、妙音の西国巡礼において高野山へも参拝していた可能性も十分に考えられよう。

各種の参詣記録においてこの西国巡礼の途次においても高野山を参拝ののち不動口から下山し「神谷辻」で不動道から北西方向に分岐して、この「槇尾道」を利用した記録を確認することはできる。この神谷辻から九度山町の長坂→椎出→丹生川を渡河→梨の木峠→槇尾山明神社→九度山→入郷→慈尊院に詣でた後→紀の川を渡河→第四番札所の「槇尾寺」を目指す槇尾道を利用する巡礼ルートも大いに利用されたとする各種の史料が散見される。

特に、東国からの参詣者においては、「伊勢詣」・

「熊野詣」・「西国巡礼」の途次において上記の「高野詣」も行うという順路を取る事例が多いことから、往路と復路が異なることが一般的となる。

この事例として、安永10年（1781）の三留八左衛門旅日記（神奈川県三浦郡葉山町）によると、伊勢詣の後、熊野三山詣・西国巡礼の途次において第三番札所粉河寺への参拝後、本来の本順路から別れて「高野辻」から上記の「西国道」を経て高野山へ詣で西室院の宿坊で泊まったのち、不動口から下山し「神谷辻」から榎尾道を利用して九度山を経て慈尊院へ詣でたのち本来の西国巡礼第四番札所の榎尾寺に戻るという行程を取っている。

管見の内では参詣者の人数やその比較できる具体的な史料は確認できておらず、近世においても網羅した史料はなく中橋家文書においてはごく一部の限られた日の記載があるようである。

（4）物の流れ

聖地高野山は真言密教の修行・修禅の場であり“物”を生産する地ではないため、修行・研鑽・造営・生活のための資材はほとんど全て山外の庄園

等から調達し運び上げなければならず、このことに関しては相当な手配と労力を要したであろう。

この“物”の流れに関して町史等においては町石道を利用していたとしているが、今のところこれに関する確実な原史料は確認できていないのが現状のようであろう。

人の流れに関しては上記の陸路がおおいに利用されてきたが、多量で重量物の運搬については限られた地形的な条件のなかで舟運は大いに活用されてきたであろう。このことに関しては日本有数の多雨地帯である大台山系の北麓を水源とする豊富な水量を有する“紀の川”の舟運が発展してきたはずであり、古くは治安3年（1023）の藤原道長による吉野・高野参詣においては紀の川（吉野川）を利用した参詣と妹背山・和歌の浦での大規模な遊覧を行っていたことが著明で、舟運を利用した大規模な参詣であったことが知られているがその詳細については詳らかではない。

このような状況の中で慈尊院と九度山地域は古代より江戸時代においてまで『高野山領』であり続けたということは、高野山にとって維持・発展



写真 1-1 九度山の航空写真 平成元年頃

していくうえで何よりもこの地を支配し続けざるをえないという地勢的な必然性があったと考えられる。

管見のうちではこれらに関する直接的な史料は確認できていないが、筆者の調査により次の項で論じるように近世において「九度山」は高野山の外港として機能し続け、重要な川湊として大いに発展してきた事を示す『絵画史料』が相当数確認しつつある。更に近代までのみでなく昭和時代の中期においても新たな近代交通機関の発展（日本道路公団による有料道路開設）に際しても、地勢的な優位性を維持しながら発展し続けてきたと考えられる。

このように「槇尾寺」と「高野山」を繋ぐ『槇尾道』において慈尊院・九度山はこのほぼ中間に位置し信仰と物資輸送道の中継地であったが、物資輸送にかかる史料の研究はすすんでいない。町史においては高野山への物資の輸送は慈尊院の川湊から町石道を経て行われていたとしているが、その根本的な史料・具体的な数量に関する研究はまだすすんでいない。

中世以前における慈尊院の川湊に関する史料・古絵図はまだ確認されておらずその実態は不明であるが、御朱印縁起等に記された状況から考えて政所と慈尊院は紀の川の左岸に位置しており、川湊は政所の北側の川畔に臨んで設置されていたことは先ず間違いのないことであり、天文9年(1540)の紀の川の大洪水により寺院としての「慈尊院」のほとんど総ては流失したとされていることから、その北側に設置されていたであろう川湊も総て流失したであろうことは間違いのないことと考えられ、その川湊施設は壊滅的な被害を被ったと考えられる。

史料①高野山東京別院蔵の古絵図（江戸時代前期から中期の作製）においては慈尊院地区における川湊施設は描かれておらず、また九度山の「舟戸地区」においては他の江戸時代後期の古絵図等に描かれている石積みによる扇形状の川湊施設で

はなく、唯一の大規模な石造の階段状構造である「雁木構造」による川湊施設が描かれ（川面より露出する5段の階段状遺構）その背後には小規模な町並が描かれていることからみて天文年間の大洪水による壊滅的な被害後において、高野山への物資輸送を支えている川湊施設はその罹災後の早い時期から「舟戸地区」に移設されその機能の多くを果たしてきたと考えられよう。

このような地形的・歴史的な経緯の中で「九度山」地区は大いに発展してきたものであり、この地は結晶片岩の高い崖地の上に営まれてきた集落でその外観や景観は近隣の集落とは全く異なり、まさに物資の輸送基地としての機能が集約されてきたことに関連する遺構や空間を呈していると考えることができる。

これまでの九度山内における町並については、昭和40年に編纂された「旧町史」と平成21年までに編纂された「町史」には九度山町内における物流について多少の記載はあるものの、町並そのものに関する記載はない。

平成8年に「紀の川水の歴史街道編纂委員会」が編集した『紀の川—水の歴史街道—』の第3章「九度山の舟運」においては、根本史料の明示はないがその歴史・遺構については歴史地理学的な考察に基づき記載しているが、町屋及び町並の建物については「箸蔵」の土蔵1棟のみについて記しているにすぎない。

筆者は平成23年度以降、九度山町教育委員会の『文化遺産を活かした地域活性化事業』の委員としても担当してきたが、その事業の中で和歌山大学システム工学部の宮川研究室による調査が行われ山口桜氏を初めとする学生・大学院生による調査が継続され、令和2年に宮川智子氏らによりそれまでの成果をとりまとめ国際学会で「九度山町の町並とその景観について」を発表・掲載等されてきた。

これらはそれぞれのテーマ別の研究が中心であり九度山地区全体の悉皆的・集約されたものでな



写真 1-2 遠景 西部

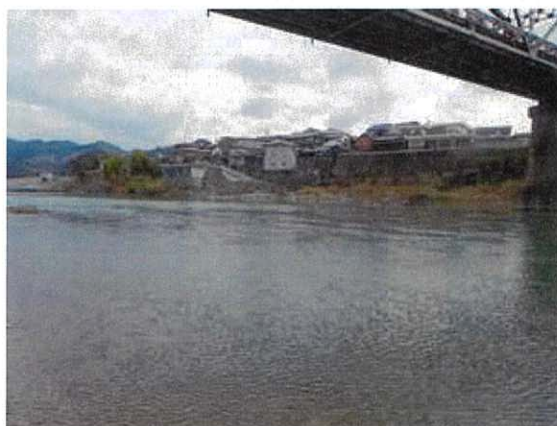


写真 1-6 川湊の遠景



写真 1-3 遠景 中部



写真 1-7 九度山の遠景



写真 1-4 遠景 東部



写真 1-8 川湊跡と町並

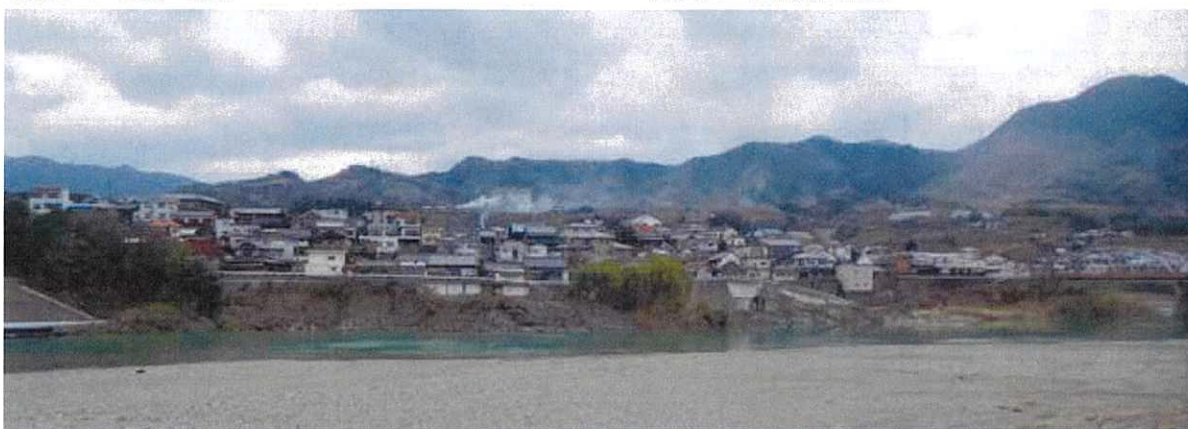


写真 1-5 九度山の町並 北方から



写真 1-9 川湊跡と土蔵群

く追加すべき事項と掘り下げた調査の必要性が論じられてきたが、その後予算の枯渇もありその調査が中座している。

このような経緯の中で筆者単独でその町並と関連する物件の調査を進めてきたが、余りにも古い歴史的背景および非常に広範な範囲であり、ほとんど研究・報告されていない町並であり、更に筆者は職制上町内全域にわたる各種ジャンルの文化遺産の悉皆的調査をも平行して急がざるを得ないという事情もあり、町並全体の調査がすすんでいないのが現状であった。

このため、まず全体の状況を把握すべきとして「外観調査」をすすめその目処が付いてきた中で、次の手立てとして未調査である個別の詳細調査を終えてからこの町並全体のまとめをすべきであると考えているが、その実施計画や進捗についてその目処を立て難い状況にある。このような状況の中で、ここ数年の間に町並全体について老朽化・世代交代・無住化等が大きく進みその詳細調査を実施していないが九度山の町並を知るうえで貴重で今後の指標となるであろう遺構が次々となくなりつつあるというのが現状である。

しかし一部の住宅等にあっては外観の保全を旨とし、良く遺された現状を積極的にその維持を進めたり、構造補強等を行いながら内部のリフォームを行うという一この町の歴史と景観に誇りをもって大切に使いながらその保全を図られまちづくりの活動に活用したり、躯体の構造を変更せず

外観の一部を看板建築として付加しながらも各種の事業を行っているもの、このような密集した町場にあっても江戸時代の建築になりしかも茅葺(実際は茅葺の上にトタン等の金属板で覆っている)を維持されているもの、更に行政が既に公有化して積極的にその保存と整備を行い公開・活用を図っている物件等も多く見受けられる状況にはある。

しかしこれらの積極的な保全と活用を進められている物件は町並全体から見ればまだまだほんの一部であり、九度山地区における歴史的な構造・様式に則らない新しい建築が多くなると共に一部には大きな火災が生じ大きな空き地となったり老朽化が進んだり、世代交代の中で町並や景観が大きく変化してきている。

このような事態は日本国中のいたる所においても同様に近代化と過疎化が並行するという大きく変貌しつつあるというのが各地域において苦慮し続けているのが現状であろう。特に当地のように歴史に裏打ちされそれぞれの特徴を遺している地域にあっては、筆者の提唱している“文化遺産を活かした豊かなまちづくり”^{註13}の手法をも活かして更に町並全体の保全と活用について再検討していただきたいと願っている状況である。

このようななかで今までに集約できた事項について取り敢えずまとめ、この町並の歴史・特筆等の一端を知ってもらい住民と行政が一体となりその対応を議論できるようになってほしいとの考えにより、この一文とデータを取りまとめた次第である。

第2章 慈尊院の川湊と町並について

1節 はじめに

本稿の「九度山の町並」を考えるうえではその基盤となった『舟戸の川湊』の機能を基に発展してきたものであり、また九度山の川湊と町並を考えるうえでは九度山地区に先行してきた慈尊院地区における川湊と町並の特質を探る必要がある。しかし管見のうちではこれらに関する中世以前に関わる史料や古絵図はなく、近世に入ってからやっとその一部について散見されるのみというのが現状である。

九度山の川湊とその町並についての歴史的経緯等については詳しく判明していないのが現状であるが、それに先立ったであろう慈尊院の川湊と町並についても同様であり、古代・中世にまで遡る状況については更に全く判明していない。中世後期である天文9年（1540）の大洪水により『旧慈尊院境内』が殆ど流出したとされていることから、一般論として境内はその後現在の地に移転されたとの説をとっているのが現状である。このことからして紀の川に面して設置されていた川湊とそこから慈尊院につながっていたであろう門前の町並についても壊滅的な被害であったことが容易に想定されている。

両地域における中世までの川湊・町並を描いた古絵図は確認できていないが近世においては若干の基礎史料となる古絵図が確認できるため、この



写真 2-1 慈尊院境内 北から

状況から現状で把握できることと一部関連する慈尊院の建造物や工作物についてその概要を記してみることにする。

2節 慈尊院の概要

(1) 慈尊院建造物の造営と参詣ルート

慈尊院地区における古代から近世における川湊と町並に関する記録については全く不明であるが、慈尊院堂舎の造営の概観については一部想定が可能となってきた。管見のうちでは特に中世に関する記事は元禄7年（1694）に編纂された『高野春秋編年輯録』（以下「高野春秋」と略する。）を中心とする後世の史料やその伝承にほぼ立脚している内容が多いのも現状のようであろう。

慈尊院の中世後半における造営については、「高野春秋」において信州の妙音比丘尼の事績が断片的に語られている。文明10年（1478）3月に何度目かの西国巡礼の折慈尊院にも詣でてその折に紀の川の氾濫を予想し、自費でもって「神通寺の山趾」（現在の地？）に曳き移したとしているがこの記事の年次は誤りである。このことについては妙音自身が慈尊院へ納めた「巡礼札」^{註14}には文明10年は妙音自身が生まれた年であり、天文9年は生



写真 2-2 巡礼札 左は表 右は裏

年62歳であると記しており、「高野春秋」の記載事項については他の史料からの検証が必要である。

次いで、「高野春秋」には天文9年（1540）4月9日に大洪水があり慈尊院伽藍の過半が流出したため、先に築いていた上の地である「上築地」（現在の地？）に堂塔鐘楼を曳き移したとし、その9月には曳き移した伽藍の造営が完了したと記されている。この巡礼札には妙音比丘尼が同年正月の西国三十三所巡礼においては三十三回目であり満願を果たした折りに慈尊院にも詣でたことを記し、更に9月には弥勒堂修理の「柱立儀式」にも参列したこと等が記されている。

しかし、この巡礼札には妙音の巡礼ルート及び高野山にまで参拝したことは記されておらず、また麻生津峠を経由する「西国道」利用の実態も不明である。

本稿の本題の一つである「物の流れ」に関する史料はさらになく、管見のうちでは特に中世にまで遡る川湊に関する記録は全く確認できないという状況にある。

また歴史地理学と文献史学等からの研究（中野栄治・山本智教・岩倉哲夫氏論文等）によりその地形的な復原がなされ、慈尊院の旧境内は現紀の川の河川敷とその北方に広がる二町四方等の境内を構えていたが、天文9年（1540）4月に紀の川の大洪水によりその境内の全てまたは北方の過半は流出してしまったとしているが、川湊の施設については全く論じられていない。通常の方からすると境内地が殆ど流出したとのことから判断すると、その北方の紀の川畔に所在していた川湊の施設も完全に流されてしまったと考えられる。

最も古い古絵図である『高野山御朱印縁起』の見取り図・記載内容から見て、慈尊院・政所は紀の川の左岸際に描かれているが川湊の施設は描かれていない。天文9年の大洪水によりその境内地の全部または北側過半程度が流出し、更に高野春秋によると同13年（1544）には再度の洪水により『古伽藍地』が全て流出し川の流れになったと記さ

れていることから、伽藍の北側（紀の川畔）に所在したであろう川湊の施設も全て流出したと判断せざるを得ないであろう。

（2）慈尊院弥勒堂の再建等

「高野春秋」には残された堂塔を曳き移し伽藍の築造が完成し今（元禄年間）の堂塔がこの折りのもので、塔は半分未完成の「建掛塔」であるとしている。

その堂の一つである弥勒堂（重要文化財 正面三間、側面三間、一重、宝形造、檜皮葺）については近年までは鎌倉時代の再建とされ、側廻りの四方は小屋裏の墨書から天文9年（1540）の再建であるとされてきた。しかし筆者の研究により内陣の一間四方については来迎壁を除く三方は開放とし低い須弥壇に擬宝珠高欄を構えるという「一間四面堂」のいわゆる阿弥陀堂形式で、その様式からは平安時代後期の建築であることを示した。それに関する古記録と合わせて検討して平安時代後期の承安3年（1173）に金剛峯寺座主である「禅信」が自費でもって仮堂として再建した堂であることを論じ、この内陣部分はそのまま伝えられていることを示し県内で最も古い建築であることが判明してきた。

その後、文安2年（1445）に内陣の三方を閉鎖した現在の形式に改造され、その後天文9年（1540）の洪水に関係して曳屋等がなされ、外回りはこの折に大きく修理されて現在に引き継がれ



写真 2-3 重要文化財 慈尊院弥勒堂

てきていることを報告した。内陣の柱材に残された筋違等の圧痕や釘穴とみられる痕跡等からみて曳家等をしたであろうと考えているが、どの地点から曳家したのかについては全く不明である。

しかしこの論考で県内において現在にまで伝えられてきた建造物のうち、この弥勒堂は最も古い建造物でありしかもその内陣部分は唯一平安時代にまで遡ることを示すことができることとなった。

また「高野春秋」にはこの折りに曳家されたとする「塔婆」は現在の多宝塔（県指定）に改造されたもので、近年その半解体修理時の調査により室町時代後期の三重塔で未完成であったいわゆる「建掛塔」であり、曳家されたのち寛永元年（1624）に現状のような多宝塔に大改造されてきたことが判明し、非常に特異な塔婆であることが判明するなど慈尊院における造営の経緯とその構造について大きく判明しつつある。

(3) 慈尊院の築地塀

現在の境内地を限る築地塀についてはまだ解明を要する事項が多くある。「高野春秋」に記載のある妙音比丘尼が紀の川の氾濫を予想し伽藍の一部を現在地に移築したとされているが、このことについて現境内の三方に巡らせた最高高さ約3.6m・当初の規模は延長約170mを越える大規模な築地塀で各版築層の厚みは約5～7cmで丁寧な幾重にも築造された版築構造が観察され、古式な技法による築地塀の構造である。

この築地塀造営に係る正確な年次は確定できて



写真 2-4 南築地塀

いないが、天文9年の大洪水により伽藍が移転されたという口伝等から、天文9年以降と判定されているが、次に述べるような経緯を考察できることからこの時期よりもっと古いものではないかと考えている。

この築地塀は、南築地（西門から南端まで）は32.7m・北西築地（西門から北門まで）は折れ曲がり延長36.7m・北築地（北門から東側まで）は25.5m・東築地（東門から南端まで）は21.1mの延長116.0mの5棟から構成されている。本来は北築地から東門まで折れ曲がった1棟で構成されていたが、明治時代末から大正時代頃に庫裡を建築するためその北東隅部分が削り取られたようである。

築地塀は通常の土塀とは全く異なり、通減を持ち厚みのある強固な型枠を組み立てた後に山土と結晶片岩の小さな割石（または小さな砂利）を混ぜた材料を型枠内に入れタコ等により非常に強く突き固めたのちに次第に上部へずらせながら何十層も築造する工法で、古代の古墳や大規模な建築の地盤基礎として大規模に何十層も突き固めて地盤や基壇を構築するという上等な技法である。

慈尊院の築地は各版築層の仕上がり厚さは平均約6cm程度の丁寧な築造で立ち上がりの両面にはその施工面が良く観察できる部分が残され、胴板の1工程とみられる高さは約30cmのようである。特に東築地の両面には築造時における胴板との剥離をよくするためと考えられる黒褐色系の油脂状の薄い油膜面が多く残されており、細部技法が判



写真 2-5 北西築地塀

明する。

築地の一部には小さな玉石を混ぜ突き固めた部分が逆凸状に分布する部分が観られここは相当に古い中古の修理箇所、他には赤っぽい山土に碎石等の混入がなくワラスサが入った粘土を塗り込めた部分は近世以降の補修箇所もみられるが後世の修理箇所はほんのごく一部であり、当初のものが非常によく遺されている。

この築地塀の上部は平らに仕上げ、木造の桁・梁・棟束・棟木を組みあげて垂木を納めて本瓦を葺く本格的な遺構であるが、木造部分については室町時代に遡る部材はなくすべて近世以降のものである。

県内における築地塀の遺構はここ慈尊院と金剛峯寺本坊の大主殿と新別殿を区画する部分に残されているのみであり、全国的に見てもほんの限られた極一部のみにみられる丁寧で特別な塀で、一般の土塀とは築造の技法は根本的に異なる貴重な遺構である。

(4) 慈尊院境内と建造物の移転

高野春秋の「文明10年」の記載では、妙音が自費で前もって「神通寺之山趾」(現在地?)へ曳移したとするが、天文9年の巡礼札(妙音本人が記した木札で慈尊院へ奉納したもの)には文明10年は妙音の出生の年としており、高野春秋の「文明10年」の記述年次は誤りであることから「前もっての移転」も誤りである。また大洪水による被害を想定し、現在地に先行して曳家・移築したとしているが、更にその前に先もって築地塀を築造し

その敷地を整備したとする記載についても同様で後世の編集であろう。

同書の天文9年4月の項において、大洪水のため境内の過半(または全部)が流出したため先年妙音が準備していた「上築地」(現在地?)に曳移していたとしているが、この「巡礼札」には「同年9月23日」弥勒堂を「造立」するとの記載であり、この造立の儀式における供養僧2名と大工と権大工2名の具体的な役職名と個人名が記されていることから判断してこの「巡礼札」記載の内容については事実のことであろう。

更に、平成25年における弥勒堂の屋根葺替事業において確認された小屋裏の化粧裏板墨書^{註17}には「九月 御堂柱立」との墨書が発見されており、この墨書位置は小屋裏であり工事中でしか記載できない場所であることから、この9月には完成しておらず「柱立」の儀式が行われたのみである。

同書の「天文10年3月」の記載には 伽藍の修理が完了し落慶法要が営まれ、堂内にこのことを記したとしていることから、各種の堂舎が完成しその落慶供養は翌年の3月に行われたようであり、更に「天文13年7月」の記載には大洪水のため残っていた旧伽藍跡地全域が更に流出したと記している。

築地塀の造立については記録がなく不明であり、弥勒堂には曳家等したと考えられる痕跡はみられるがどの地点から曳家したかについては全く不明である。弥勒堂のこの修理後において築地塀を築造したのか、天文9年の洪水以前において重要な



写真 2-6 北門と築地塀 遠景は紀の川



写真 2-7 東築地塀

建物を移築すると共に築地塀も造立したかについては、現時点においては明確にしがたい状況にある。

更に一般論として、洪水の予測または被害予防対策として緊急に対応せざるを得ない中で、この本格的で大規模な築地塀の構築は工法・技法から観ると多額な経費と長い工事期間を要するものであり矛盾することは明らかであろう。大洪水による被害の防止を図ろうとすることを目的とする記載内容であることから考えると、境内地の中枢建物よりそれを取り囲む築地塀を優先して先に築造することは非常に不自然なことから考えられる。

史料的には全く確認されていないことであるが、次に述べるように逆説的な考え方が可能ではないかと思料している。天文9年に流出したとされる旧境内に対しこの築地塀で囲まれた「現在の弥勒堂地域」は、慈尊院の『奥の院』的な特別な地域（聖地）であったのではないかとする考え方である。このことから最も神聖な場所（廟）を築地塀という特殊な技法でもって区画する必要があったのではないかと考えることができよう。

更に町石道のルート設定についてはその起点は壇上伽藍の「大塔」を基準としており、慈尊院までを「胎蔵界」の180尊になぞらえ180町に、奥の院御廟までを「金剛界」の37尊になぞらえ37町とする真言密教の空間認識に合致させたとされている。現在の180町石の建立地点について、これより高野山側へはほぼ正確にそれぞれ1町毎に配置されていることからして移築されていないと考え



写真 2-8 180 町石

られ、起点の一つでもあり得る180町石の地点はどのように設定されたかについては不明瞭であり議論されていない。

天文9年の大洪水により慈尊院の旧境内はほとんどが流出されたとされ、紀の川畔に所在した「下乗石」・「町石卒塔婆供養碑」と伝わるその地点も不明瞭である中でこの「弥勒堂」は大師母君の廟所であるとされている。上記で述べた築地塀で囲まれた現在の弥勒堂地点は「大師母公の御廟」であり・奥の院御廟は「大師そのものの御廟である」ことから、その基準点となり得るであろう。大師母公の御廟（旧慈尊院の奥の院）である地点を180町石に設定したと考えることは可能ではなかろうか。管見のうちでは、起点となる180町石の設定についての具体的な史料は確認されていないのが現状である。

この考え方については具体的・確実な史料や古絵図等に基づいたものではないが、以上述べてきた両「廟所」としての位置付け・「築地塀」という特殊な空間設定・現在の180町石以降の距離配置等から考えて観ると「180町石」は慈尊院境内の移転に伴い移築されたものではなく、当初から母君の廟所をもう一つの基準点と設定したのではないかと考えることが可能であろうと思料される。

これにより先の各種の疑問点の多くの事項について説明することが可能となってくるが、次のとおり当初からこの地に「弥勒堂」が建てられていたという科学的・考古学的な根拠はまだ確認できていない。管見の内では、洪水前の想定されている旧慈尊院境内地域において考古学的・科学的に基づく中世以前の遺構や史料はまだ確認されていないし、平成11・12年度の重要文化財慈尊院弥勒堂防災施設設置に先立ち貯水槽と配管の工事が及ぶ範囲内のみにおける事前の発掘調査（工事範囲の深さまでのみにおける事前調査であるが）^{註18}においても中世までの遺構は全く確認されておらず、この調査範囲内における境内は近世以降の地業であることが確認されているのみである。

更に現境内地の状況について、筆者が行った平成27年に実施した重要文化財弥勒堂の西に続く一段低い石造柵の修理に伴う工事範囲内の事前確認調査において、北門東側の築地塀について現基壇上面から深さ約0.5mの範囲においても築地塀南面の仕上面は大きく風蝕している状況が確認され、この一段低い基壇は近世後期から近代にかけての相当に新しい時期の構築になることが判明した。

また先の弥勒堂背面における防災施設配管ルート（堀方深さ0.8m）の調査においても近世以降の埋土であったこと、その後の庫裡の改修工事に伴う一部の基礎及び水道配管ルートにかかる筆者の事前確認調査においても同様であり、弥勒堂周辺の考古学的な状況についてはまだまだ不明である。

建造物と境内に関する新しい事実が相当判明してきたが、弥勒堂直下の遺構については不明であり、根本的な事項についてはまだまだ解明できていないのが実態である。

3 節 慈尊院の川湊と町並

(1) 川湊と陸路における運搬ルート

町史・通史編 461頁によれば、慈尊院地区の川湊施設については天文9年の大洪水前または後との区分は明確にしていないが、高野山への物の輸送は慈尊院の川湊から町石道を利用して物資を輸送していたとしている。

同編においては不明瞭な部分もあるが、川湊の設置条件として『イ、荷物を舟から降ろしやすい場所であること』と『ロ、荷物を山上まで運搬する道路の条件がよいこと。の2点である。舟から荷物を降ろすには川の水量が多く遠浅の浜が必要である。・・・嵯峨浜と呼ぶ遠浅の浜があるので、少し棧橋を造ればコロ引きで荷物を陸揚げすることができる…』としているが、筆者は『コロ引き』では直接舟から陸揚げすることはできないし、このイの『遠浅論』の条件設定には大きな疑義をもっている。

川湊設置の自然的な条件としては、水深があり流れが緩やかな淵が絶対的条件と考えるべきであ

ろう。この遠浅論において絶対的な根拠としている要因としては慈尊院地区には、①政所と大師母君の霊廟でもある慈尊院が設置されている、②真言密教の教義上「町石道」が最も重要な参詣道で、その起点が慈尊院である、③高野山の『政所』がこの地に設置された後の中世から近世においても政所の執行職として「中橋家」がこの地に居住し物流の管理機能を差配してきたという「歴史的な要因」が大きな要素としてあげられる。

このような状況からして慈尊院地区の川湊としては不利な自然環境にあったにもかかわらず、無理をしてでも連綿として中世後期以降においても慈尊院地区に川湊を存続させなければならなかったのではないかと考えている。

町史における慈尊院の川湊としての設置理由として揭示された遠浅が物理的な設置条件ではなく上記の歴史的要因からくるもので、川湊の機能上から不利となっているにもかかわらず棧橋を造ってでも川湊としての物理的な機能を代用せざるを得なかったのであろうと考えられる。

近世の慈尊院における川湊と考えられる地点については、上記のとおり古絵図調査からは2地点があったことが考えられる。慈尊院正面から北へ約1丁半の川岸に位置する「下乗石建立地」（以下「下乗石地」という）と、ここから約150m下流に所在する「嵯峨浜」（丹生官省符神社の御旅所）である。

慈尊院は天文9年の大洪水において境内のほぼ全域が流出したとされていることと、歴史地理学等による復原により、その旧河道は現紀の川の流路から北方約1～2kmの辺りにまで大きく湾曲（蛇行）していたが、天文9年の大洪水により真田淵手前からほぼ直線状に西に向かって流れる現状の流路になってしまったという大きな被害が生じたとされている。このことから、慈尊院地区における川湊施設は全て流出してしまい、川湊の関連施設は残されていないという考えに立脚していると思われる。

慈尊院の川湊で陸揚げされた荷物は、基本的に町石道を通して高野山に運ばれたとしているが、その物量的な量を示す史料の調査は全く進んでいないようである。

この嵯峨浜が近世においても川湊であったことを示唆する遺物として、先年嵯峨浜の川の中から石造五輪塔等の部材が引き上げられて慈尊院境内に保存されている。この五輪塔の部材は2基分の個体があり、①水輪を除く部材（地輪の幅は約90cm、残存全高約2.6m）、②地輪と水輪を除く部材（残存全高約1.9m）でほぼ同規模で共に硬質の砂岩製（？）で五輪の種子のみが彫られており細部の銘文は高野山で彫り込む予定であり、被葬者・年次は不明であるがその様式からみて明らかに江戸時代後期のものである。

その他花崗岩製の八幡鳥居の部材（基礎2材、柱2材、島木1材）は銘文はなく時代も不明である。これらの部材はほぼ一箇所に埋もれていたと言い、川舟から降ろすときに誤って落下させてしまったといわれている。

この慈尊院地区と九度山地区における川湊については、町史・通史編458頁～の中橋家文書の文化7年（1810）正月における記録から『長州大主大膳大夫様御石塔指図并才積并和歌山高瀬舟賃山登せ方諸入用一色積書』には慈尊院（嵯峨浜）から陸揚げし町石道を利用して高野山奥の院まで運び上げる五輪塔運搬経費の明細を記しており、町史では『紀伊続風土記』を引用し、「高野山の石塔は皆当村（九度山村）より運ぶ故に村中これをもって産業とし村商いより戸数多し」とし、また「九



写真 2-9 嵯峨浜出土の五輪塔

度山がこのような盛んになったのは元禄期以後のことで、それまでは慈尊院が中心であった。」としている。

しかし近世の古絵図であるが、高野山東京別院・高野山西南院・高野山持明院・横浜海照寺・紀伊国名所図会においては、慈尊院地区には川湊施設はなく横渡しの状況のみが描かれている。一方「九度山地区」においては、中世以前における記録や古絵図は確認されていないが、近世においては江戸時代前期からの古絵図で確認できることから、川湊と町並については考察する事は可能となってきた。

町史で述べている川湊からの高野山への陸路運搬の条件設定については、町史の考え方は是認されよう。陸揚げされた荷物の運搬について槇尾道を利用した場合は伽藍まで約16km・町石道では約20kmとなり、後者においては距離は長くなるが比較的緩やかな勾配で大きな川を越える必要がなく、重量物や長尺物の運搬については適したルートであったであろう。

紀伊国名所図会巻四に描かれた『大門口より七

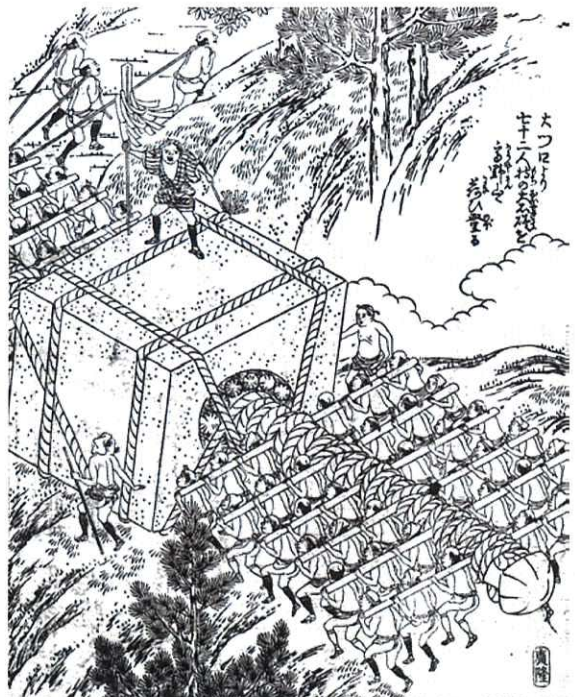


図 2-1 紀伊国名所図会 七十二人持ちの図

十二人持の大石礎を高野山へ担ひ登る』と注記された絵図はあまりにも著明である。

この図に描かれている石材は、奥の院の墓域に建立される大型の石造五輪塔本体の最下部材となる「地輪」を担いあげる光景を描いたもので、地輪部材を上下に貫通させた大穴に長く差し込んで装填し直接地輪部材を支える太い「心棒」と、これに直交し各人が肩で担う細い「担い棒」で構成する運搬手法である。各担い棒においてはその左右にそれぞれ3人ずつが少し横向きに肩で担ぐと想定すると、この運搬方法による手法では横幅は約6メートルとなり、その道幅を要する運搬方法である。

ちなみに奥の院墓域のなかで最大のものは『一



写真 2-10 崇源院墓所 全景（鳥居横の人物は成人男子）



写真 2-11 崇源院墓碑 詳細

番碑』とも呼ばれる徳川二代將軍秀忠夫人の「お江」(崇源院)の五輪塔供養碑で、五輪塔みの総高は約4.9m・地輪部の横幅は1.8m・基壇の大きさは4.0m四方で基壇を含めた全高は8mを超える特別巨大な供養塔であるとされているが、さらに基礎・擬宝珠高欄と階段・台座・華瓶・線香立・石敷の床面・四十九院(柵)・鳥居・多数の灯籠など付属の関連施設を含めると計り知れないほどの膨大な石材の量となっている。

他の大名家の墓所においても、何代かの藩主や家族・陪臣関係等々様々な要素の石材が必要となり、これらの石材はすべて高野山で産出しない瀬戸内海沿岸の花崗岩が中心であり、その運搬も膨大な経費を要したであつたであろう。

この運搬詳細については先に(前註6)で論考したものであるが、その内容の一部について修正・追加すべき事項が生じてきた。

この紀伊国名所図会に描かれた「七十二人持の図」は様々なところで引用されてきているが、筆者は一つの大きな疑問点を持っていた。それはこの運搬手段においてはその道幅は最低でも6m程度が必要となることから、現状の「町石道」の幅は広い部分はあるもののその残された現況から観て、約3m程度の狭い部分が大半でありこのような運搬手段では通行できずこの図は空想的な絵画であろうと考えていたが、近年その絵図を子細に検証することにより、その工夫の状況が判明してきた。

地輪を貫通する「心棒」とそれと直交する「担い棒」を緊結している太い綱をかけ廻す方向に工夫されておりほぼ一定方向に廻されていることから、その運搬に当たって担い棒は必ずしも直交させる方向のみでなく狭い町石道部分にあっては掛け廻している綱の反対の方向にあわせて、担い棒を水平方向に回転させ狭い道幅に合うまでその見附状の幅を狭めることができる工夫がなされていると考えられるようになってきた。この方法は非常に工夫を凝らした運搬手法で、狭い町石道にお